

まちづくり講演会

講演録

日 時 平成22年1月13日（水）18：30～20：00
場 所 明石市生涯学習センターホール

1 開 会

（司会者）

本日はご出席賜りましてありがとうございます。只今からまちづくり講演会を開催いたします。明石市では第5次長期総合計画の作成に取り組んでいます。この講演会は市民の皆様とともに、これからの明石の姿、目標などを考えることを目的として開催いたします。本日も講演をいただきますのは佐藤友美子さんです。佐藤さんは財団法人サントリー文化財団の上席研究員として社会と文化をめぐる様々な研究に携わられるとともに、環境省や法務省、文化庁などの審議会委員などを歴任されるなど幅広くご活躍されています。本日は生活文化の視点と題して、身近な日常の暮らしや活動を通じての、これからのまちづくりについてご講演をいただきます。

2 講演会

（佐藤氏）

成熟社会の生活文化の視点から

皆さん、こんにちは。私は兵庫県民で神戸市に住んでいます。なかなか明石に来ることがなかったのですが、最近、市役所とご縁ができて来るようになっていきます。明石の為にどうことができるかということで、ヒントになるようなお話ができればと思っています。

はじめに

私の履歴ですが、1975年にサントリーに入って、1989年から研究所に入り20年間、生活文化の研究をやってきました。主に生活の中の楽しみというテーマで研究してきました。豊かになって人は幸せになったか、成熟して皆が生き生きとしているかということ、問題もあるのではないかと、市民一人ひとりがどのような考え方で社会と関わっていくかということによって、新たな方法も出てくるのではないかと考えています。現在は文化財団にいますが、そこでは地域文化と交流、働き方をテーマとして研究しています。20数年間、生活研究をやってきました、行政は行政の立場からものづくりや地域を考える、私達は使い手や現場という発想からものを考えていくべきであろうと考えます。また、アンケートや世論調査だけではなく、皮膚感覚で変化している物をどうやって捉えて、発信していくかということに大事にしようと思っています。自分が社会の実現のために何ができるか、そういう視点を大切にしたいと思っています。

成熟社会のまちづくりを考える 生活文化の視点から

今日は、成熟社会で何が変化したのかということをお話したいと思います。まちではいろんな変化が起こっております。皮膚感覚で見ていると変化は分かります。様々な情報を集めて分析しまして、明石の事例ではないのですが、いくつかの事例を紹介させていただいて、皆様がこれから

地域と関わる時のヒントになればと思っています。

何が変わったのか

まず家族構成と意識の変化という2つの点からお話します。

家族構成の変化

これまでは、夫婦と子供2人を標準世帯として、地域づくりや行政の仕組みが考えられてきました。ところが現在、実際には夫婦と子供1人や子供のいない世帯が半数近くになっています。こうした変化を受け、標準世帯そのものの考え方などを改める必要があります。多様な選択肢がある現在の社会状況下において、行政が全てにおいて細かく対応していくと、莫大な費用がかかります。よって、その部分を市民の力で埋めていくということも考えなければいけません。

世代の気分 ～価値観が変わった～

それから、世代間のギャップを考えないといけません。環境によって人は変わります。特に戦前戦後から現在にかけて、非常に大きく変化しました。例えば、私が子供の頃、家に電話は無かったのですが、今は小・中学生も携帯電話を持っているような時代です。そうすると自ずとコミュニケーションの方法が変わってきます。昔のように何もない時代は、何もないから自分で工夫しなければいけません。お金があっても物は買えない時代であったから、自ら工夫したことに加え、普段は我慢し、お正月など晴れ着に着替えるなどしました。最近はそうではなく、いつでも新しく綺麗なものを着ています。今の若い人たちは、全てが有る世界で生きているから、物に対しての執着がありません。流行している物を持つという情動的な価値の方が大きくなっています。上の世代は、人の為になにかやるのが当たり前で、子供や孫の教育の資金などに消費しています。昭和30年代頃から豊かになってきて、特に女性は働くとか、結婚するなどの選択肢が増えてきました。物は手に入るようになったが、人と違うものを持ちたい、ということでブランドやグルメ志向など差別化が図られるようになりました。最も若い世代はプロセスを経なくても、最初からお金で物が買えてしまいます。インターネットでどこでも繋がるコンビニは24時間やっています。順序を経て何かやる必要が無くなった世代です。皆が同じことが出来るようになりました。そうすると人と違うことがとても重要になってきます。今の人は、どんな場合も非常に気を遣っており、自己主張することができない、いわゆる息苦しい部分を持つようになっています。どうやってそこを温かいものにしていくのかというのは地域の課題でもあります。これから皆さんが会議するとき、世代によって全然意見が違ふことがあります。その時は、自分はどこに位置するかということを考えておく必要があります。相手との距離を測って、最初から価値観が違ふと否定してしまうのではなくて、相手の環境などを考えて接する必要があります。

世代で違う心地よい空間

①心地よい空間【ミドル世代】

心地よい空間というテーマで写真を撮ってもらったら、上の世代の人たちは、温泉に行っ自分が接待されている様な場面などの写真が出てきました。この世代は家を褒めてもらえるなど、世間の評価が高い空間が心地よいと感じているようです。

②心地よい空間【ハナコ世代】

真ん中の世代は、ホームパーティーなどを行っている写真です。男女の関係もフラットで、みんなで楽しみたいとか、オフタイムなど仕事以外の家族や友達などの存在といった写真が心地よいと感じているようです。

③心地よい空間【若者】

一番若い世代では、人のいない空間の写真がほとんどです。こうした世代は誰かに自分を否定されたくないと考えています。居酒屋などでも店員さんの目を気にしてしまうので、今は個室対応になっているところが多くなっています。自分の価値観の中で楽しくやりたいという部分が大きいですが、だからといってそれで本当に満足はしていません。人と繋がってみたい、自分を変えたいという思いは持っているが、こうした心地よい空間などの中にはそうしたものは出てきません。

世代間の意識の違い

私の世代は、一緒に旅行も勉強もするなどアナログ時計のような世代でした。今の人はデジタル時計のように1分ごとに変わっていくような世代です。アナログ世代は欠落感があったから、豊かにしたいと思っていましたし、努力すれば幸せにもなりました。しかし最近はそのいきません。私達が若い頃は目標を達成するため、手続きを大事にしました。ウイスキーや車などでも最初は低いレベルのものから段々ランクを上げていきました。そうしたプロセスを経ながら成長していくのと物のランクアップがセットになっていましたが、今は最初からブランド、高いものを平気で買うし、安価なものも買います。そういう状態ではプロセスなどはあまり意味がなくて、結果だけが大事になっています。また、今の人たちは選択肢が多く、それが迷いに繋がります。離婚や転職も多くなっています。昔は転職という選択肢はほとんどなかったから、頑張るしかありませんでした。エネルギーも集中できるから、ある意味そこで成果を挙げることができましたが、今は基準も変わってきて難しくなっています。それは悪いことではなくて、人間らしく生きるために仕事をしたいという、ある意味では成熟してきている証拠だと思います。

人間の本質が変わったわけではない

でも人間の本質は変わったわけではありません。昔は結果的に見れば選択肢がなく、ある意味幸せでしたが、現在は多くの選択肢を抱えている上、物差しも一つではありません。私達の頃は仕事で成功していれば家庭でも威張っていることができました。でも今は家庭でも役割があるし、自分というものを持ちたがっています。専業主婦の家庭でも、月に1回は自分が子供の面倒を見て妻にフリータイムをあげますが、その代わりに自分も一日フリータイムをもらうというような自分の時間を確保することが当たり前になっています。そうしたことを踏まえてまちづくりを考えていかないとはいけません。男性ならば盛り場とか、女性であればデパートなど以外に、自分自身の趣味を生かせるような場所を求めてきています。まちが変化してきていると言えます。

「まち」で起こっていること

多くのまちで人と会話をすると、「まち」では面白いことが起こっていることがわかります。

まちのアート

ファーレ立川という所で、米軍基地の跡地に海外からのアートによるまちづくりを行いました。立派な作品を作っても管理できないこともよくあります。作品の前に椅子などがあればともかく、何も無かったら、自転車等を置かれてしまいます。

ファーレ立川アート管理委員会が発足

ファーレ立川アート管理委員会ができて、アートの製作者による解説などの仕組みができました。そうしてアート作品を掃除しようなどの動きが出てきました。立川市はまち全体が美術館というコンセプトを作りました。いい物を作ったからそれで済むというわけではなくて、どうやって市民と繋ぐのかという観点がないと、宝の持ち腐れになります。

モノを創らずモノを創った 砂浜美術館（高知県・黒潮町）

砂浜美術館は普段は何も無い砂浜なのですが、何も無いところにTシャツを募集して展示しました。何も無いからこそ出来る部分もあります。近くにあるものを利用して、人に集まってもらう、モノを創らずモノを創るというユニークな発想です。

<地域> NPO「水辺のまち再生プロジェクト」

NPOが実施したまち再生プロジェクトです。1月に1回水辺ランチということで、勝手に集まってランチを実施しています。

水辺カフェ

1年に1回だけ実施する水辺ナイトは、車の通らない橋を占拠して皆でお酒を持ち寄って飲むものです。夕涼みなど非常に気持ちいいものです。

水上タクシー実験運行&水上カフェ&バー

行政による社会実験としてNPOに委託して水上カフェを実施しました。テーブルを作って、人が集まりました。やりたい人などに実施してもらおうと、リーズナブルで面白いものが出来ます。

大阪クラシック

大阪クラシックといって、御堂筋を使って1週間程度イベントを実施しました。御堂筋は休みの日になると閑散としていますが、こういうイベントを実施すると、賑わい感があり、御堂筋を楽しめます。

桜の会・平成の通り抜け

安藤忠雄さんが発案した、桜の会平成の通り抜けというものがあります。大阪に桜並木を作ろうというプロジェクトで、当初寄附金として3億円集める目標でしたが、4億5千万円集まったそうです。お金が無いわけではなくて、いいことに使われるなら出したいという思いが反映されています。

佐世保市商店街連合会

佐世保市商店街連合会には長いアーケードがあり、それを利用して机と椅子を商店が準備し、参加者が持ち寄って大パーティーを実施しました。何か集まるきっかけを作っていないと、人は知り合いにはなれないということが分かります。

「まち」に学ぶ

いくつかの事例から、参加することが非常に大切であると感じています。小さな一歩でも何人かが動き出すと何かが変わってくる、それを目の当たりにした感じがしました。

これからの「まちづくり」を考える

これからのまちづくりを考えると、自立した人が出来ることを持ち寄るといことが大事です。今までのボランティアは、行政の枠組みの中で活動することが多かったのですが、それでは達成感や成長感が得られません。自分が出ることや能力を活かす形でまちと関わっていく、そうすることによって新しい価値が生まれます。

自立を超え共に生きる社会を

存在を認められるということや人の役に立つということに加え、成長したいということは、人間にとって非常に大切であり、誰もが共通で持っています。この部分をどのようにして刺激するかという事が大事です。自立とは、自分で決めたことに対し、失敗をしても受け入れ、責任をとっていく、そして次のステップを踏んでいくということだと思います。そういうことが出来る人たちが集まることによって、新しい動きが始まると思います。

社会の閉塞、市民の成熟

それが何故必要かという事ですが、今までは行政や企業など、社会に多くの事を実施してもらっていました。でも今そういう社会状況ではないのは明らかです。企業は企業活動とどういう関わりがあるかということを中心とします。その中で市民は誰かに保護してもらって存在ではなくて、自立した人間として参加していくということが必要となってきます。一方市民は充分成熟していて、単に観客ではなく実際に実施する立場になりたいと考えています。社会の役に立ちたいという気持ちは充分にあります。そこをうまくマッチングさせていくことが知恵の絞りどころです。

共立のデザイン

市民、NPO、企業や行政、それぞれの役割やできることを持ち寄って、自立した関係で参画していく必要があります。そうしないと何も長続きしません。新しい考え方を提示したいと「共立のデザイン」という新たな名前をつけました。

従来型モデル、成熟型モデル

市民の協働で実施するモデルとして、従来型と成熟型のモデルがあります。これまでは、地域の掃除などを一斉に実施していました。そうすると、参加出来ない人がでてきます。家族の形も変わってきて、働き方も多様な現状では、色んな形で参加出来る仕組みを作っていくことが大事です。いつも一緒にやるというのではなく、目的に応じて必要な時に参加できるといったことが

重要となります。また、一方的に何か実施してもらおうというものだけではなく、自ら実施していく部分をどのように作っていくかということと、参加者にもメリットがあるという仕組みにしていけないと続きません。例えばNPOだから無料でもいいということではありません。それでは、リタイアしたような人は参加できても、生活がかかっている若い人は参加できません。

呼びかけが全国に広がった 打ち水大作戦（全国）

打ち水大作戦といって、決められた時間に一斉に打ち水をするというプロジェクトがあります。皆で温度を下げるために打ち水しましょうということで、組織もボランティアの人が運営しており、協議会があるわけではありません。温度を下げるために、機械でなく手や柄杓を使って、時間を合わせて実施するという事です。確実に温度が下がりますから、効果が実感できます。皆で浴衣を着たりしながら、楽しみつつ環境に貢献するといったイベントが行われています。

ドリームと市民力を結集 天満天神繁昌亭（大阪府・大阪市）

大阪に天満天神繁昌亭という落語小屋があります。桂三枝さんや商店会の会長さんなどが中心となって作られたものです。ここの成功のカギは企業の寄付を断って、多くの人の浄財を集めたことです。そうすると、市民がお金を出しているから応援したくなります。これが今は観光の目玉にもなっています。商店街にとっても非常にいい効果をもたらしています。上手くいっている事例だと思います。

住吉台くるくるバス

住吉台にくるくるバスがあります。急な坂の上に団地があるのですが、歩いて登るのも大変な坂で市バスも走れなかったのですが、ここに何とかバスが走らないかということでみんなの力で実現したのがこの住吉台くるくるバスです。運営コストに関してはプラマイが合っているので、資金援助を受けていません。これは民間企業が請け負っているのですが、1時間に4本くらい走らさないと市民は足として使ってくれないという思いから無理して走らせました。そういうこともあり、皆の中にマイバスという意識が芽生えました。またお年寄りや子供、六甲山のハイキングの人たちが使用したりするなど、思っていた以上の積極的な活用が図られました。マイバスという意識が非常に大事で、皆が支えていくということが重要です。

誰もが主役、伝統と共存した なら燈花会（奈良県・奈良市）

奈良で燈花会が開かれています。奈良の夜は暗くて何も無かったのですが、それを逆手にとって、暗さを活かして静かな祭りをする、現代的で皆が楽しめるものということで立ち上げました。非常に面白いのは市民参加の仕組みで、当日サポーターが3000人位います。観光客も1灯500円で焚けます。それによって、参加者が自分のお祭りとして思い出に残すことが出来るのです。

区別しない介護 このゆびと一まれ（富山県・富山市）

区別しない介護「この指とまれ」というのは福祉の間では有名です。昔の大家族のようなものを実現する場所です。赤ちゃんからお年寄りまで、障害があってもなくても一緒にいるという形で、これは介護保険制度と障害者福祉、児童福祉の3つの行政と関わっていて、制度的には非常に難しかったのですが、ここの方が頑張ったおかげで、今や全国でこういう事例が実現可能になっ

ています。非常にいいと思ったのは、そこに居る人達それぞれに役割があることです。例えばお年寄りや赤ちゃんの世話などを行い、障害者は有償ボランティアとして家事などを行います。料理やお年寄りの世話など、自分の生活の勉強が出来ているのです。世話をしてもらっただけの存在ではなくて、自分がやれることがあるという中で生き生きとしていきます。

アートは地域を救うか 越後妻有アートトリエンナーレ（新潟県・十日町市）

新潟の豪雪地帯で、農業が駄目になってきて、高齢化が進み、多くの人が希望を無くしているという状況があります。何とか土地の人に希望を持ってもらいたいという思いから、現代アートを招聘しました。アートを作るために、大勢の若いボランティアが来て、お年寄りに相談しながら一緒に物を作り上げていく、という楽しさが出てきました。アートは皆で世話しないといけないからこそお互いに理解しあうようになり、里山の風景とアートを楽しむ人達が都会から沢山来るようになりました。

さるくの日常化を目指す 長崎さるく（長崎県・長崎市）

「長崎さるく」は新たな観光スタイルを模索するということで、長崎のいいものを見てもらい、まちを楽しんでもらうことをコンセプトとしています。市民プロデューサーとして60名に仕事を任せて、NPOやボランティアではなくて、仕事の延長線上で様々な企画や広報活動をしてもらっています。その方達を核にして、市民ガイド600人を育てました。このまちの楽しみ方や暮らし方などを案内できるという人たちが大勢生まれました。案内し、案内した人の反応を聞いて、市民が自分のまちの良さに気がついてきて、皆がまちを愛するようになりました。

福祉・教育・労働の接点を探る アトリエインカーブ（大阪府・大阪市）

アトリエインカーブはアーティストとして障害者の方を受け入れ、所謂障害者アートというのではなく、オリジナリティある作品として世の中に問う、ということをしています。それをマネージメントして収入を得るというやり方です。この社会福祉施設で働いている人たちもアーティストの卵です。それは自分が障害者を助けるということではなく、仕事にもなっていますし、クライアントと呼ばれるアーティスト達によって非常に刺激を受けてもいるということです。

「共立のデザイン」のポイント

真の目的が何かというのを常に皆で考えないといけないし、見つけないといけません。皆で共通にできること、また日常的に参加できる仕組みづくりも大切です。将来のまちづくりという理想は大切だと思いますが、もっと現実的で自分達で出来る範囲のところからどのように始めていくかということも大事です。参加者それぞれがプラスになることを考えないといけません。様々な人がもっと主体的に参加しやすくなるような新しい社会や仕組みを構築していくことが大事だと思います。

「成熟し、人はますます若くなる」

年齢を重ねて、人は頑固になるのではなく、成熟し、ますます若くなってきていると、思います。専門分野を極め、鳥瞰的に過去・現在・未来を見通す眼を持つ先達に話しをお聞きし、その思いを強くしました。

《まち》をつくる

人は、やりたいことに挑戦し、そこから学ばばいいのです。行政などが作ったものでも上手くいかない時はあります。そういう場合はよく検証して次に活かしていかなければいけません。まちに関心を持つ市民を育てるとするのは非常に大事です。そういう市民がいなかったらまちづくりができません。まちづくりというのは、様々な人の知恵やニーズを形にしていくものなので極めて時間がかかるものです。

成熟社会をおだやかで、明るく、面白く共に生きるために

成熟社会を穏やかで明るく、面白く一緒に生きていきたいと思います。そのためには、人間が本質的に求めている、いわばニーズの源になっているものは何か、流行に流されるのではなく、もっと先の本当に必要としているものは何かというのを考えないといけません。それぞれの人で出来ることが違うので、それを上手く組み合わせるプロセスを共有することが大事になります。こうした人間関係は最初から上手くいかないものですから、時間をかけて議論してお互いを理解することで、少しずつですが信頼が生まれてきます。時間がかかりますが、将来を考えていくためには非常に大事なのではと思っています。

(司会者)

ありがとうございました。まちが元気になるための取り組みについて、様々な事例を挙げて頂きました。この後、意見交換に移らせていただきます。

3 意見交換会

(司会者)

只今から意見交換に入ります。進行は佐藤さんをお願いします。意見交換を行っていただく2名の市民の方をご紹介します。男性が安原宏樹さんです。安原さんは魚の棚商店街で明石焼きの店舗を営業されておられます。魚の棚商店街の振興組合の理事長としてまた、明石商店街連合会の理事として明石の商業の元気作りに取り組んでおられます。そして女性の方が井上あい子さんです。井上さんは昨年までは兵庫県ケーブルテレビ広域連携協議会の事務局長として、映像メディア関連に携わっておられました。現在は明石や神戸などを中心に、情報化関連の支援業務を展開していく一方、国や県の情報化の委員も務められています。安原さんと井上さんは、明石市長総合計画審議会の委員も務めて頂いております。

(佐藤)

これからお2人にお話をお伺いしたいと思います。まず、ご自分のやってらっしゃることをご紹介頂きながら、明石のこれからの方向性についての意見をお伺いしたいと思います。

(安原)

魚の棚商店街で祖父の代から商売をしており、3年ほど前に商売替えをして、明石焼きを始めました。明石の商店街活動や中心市街地の活動、町衆明石など諸団体でまちづくりやイベントなどに関わっています。魚の棚は歴史が古く、非常に特性がはっきりしている商店街だと思います。

その魚の棚も含めて今、ライフスタイルなども含め変化してきています。大資本の企業さえ苦勞している中で、個人商店などがこれからどういう形でまちづくりに関わり、まちを良くしていけるか、という事も含めて勉強させていただこうと思っています。

(井上)

ポータルサイトの運営支援をしております。それと四国総合通信局の実証実験で、地域の映像を使って地域活性の手法のモデル化に関する調査検討会に参加しております。ポータルサイトは、ブログやホームページなどの情報を1箇所を集めて、そこに広告など掲載することによって見られる確率を高くするものです。

(佐藤)

お2人とも明石市在住だそうです、市民として明石のことをどのようにお考えですか。

(井上)

住むには申し分ないと思います。ただその良さを外部に発信する、情報発信が弱いと思います。

(佐藤)

安原さんは明石のどのあたりがお好きですか。

(安原)

もともと海の近くに生まれて、海の潮風が当たるようなところで育ってきたので、漁師さんや地元の祭りなども含め、生活とまちのイベントなどが絡んでいるところなども好きです。

(佐藤)

魚の棚商店街といえば魚です。最近の若い人は魚離れしている人が多いですが、消費者の変化は感じられますか。

(安原)

家族構成も変化してきており、都市化が進んでいるので、普段はスーパーを利用される人が多くなっていると思います。ただ消費者が多様化していく中で、あえてそうしたものを追わないで対面販売の良さも打ち出していきたく考えています。レシピを教えるなど、人を上手く前面に出していくような店作りされているところもあります。

(佐藤)

井上さんは魚の棚商店街で買い物をされますか。

(井上)

市外の友人が来る時は紹介をしますが、自身では魚の棚で買い物はあまりしません。

(佐藤)

魚の棚はフィッシャーマンズワープのように、地元の方より観光の方が多いのでしょうか。

(安原)

明石海峡大橋ができ、観光のお客さんが大橋に来られる時代がきて、その中で観光型になったり、地元を大切にしたり、店によって方向性があるって、商店街としての方向性を打ち出しにくい状況になっています。その中でもはっきりしているのが、地元にとっても使い勝手がいいなど、地域に支持して頂くということが大切だと考えています。

(佐藤)

商店街の世代交代はどうなっていますか。商売替えされていますが、どのように乗り越えられたのですか。

(安原)

年上の店主の方々ともよく議論しました。そのおかげで私達30代が、色んなことを勉強させてもらいました。商売では親の理解があったので商売替えができました。

(佐藤)

今やってらっしゃるのは明石焼きと鯛茶漬けと鯛焼き、明石にこだわるという感じですか。

(安原)

明石で蛸以外にと考えたとき、いろいろな名産品がある中で、鯛は蛸に劣らないインパクトがあったので、それを商品にしたいなという気持ちがありましたが、それだけを前面に出して商売するのは怖かったので、明石焼きと両方やりました。現在、まちづくりも蛸を前面に出していますが、蛸に特化したら注目を浴びるのですが、生態系が崩れて捕れなくなったらどうなるのでしょうか。一歩間違えたら非常に怖いです。

(佐藤)

井上さんはIT関連の支援をしてらっしゃいますが、明石でITを使って面白いことが出来るのではないかと期待しますが、アイデアはありますか。

(井上)

今、店はホームページやブログを情報発信に利用して作られるのがベストだと思います。ITの世界に拒否反応を持っている方もいるかもしれませんが、少し勉強すれば作れるホームページやブログもありますので、商工関係者の方には研修会なども開催して頂いて、情報を1箇所集中させるような状況を作られるのがいいと思います。

(佐藤)

最近のインターネット通販はすごいですね。洋服の購入やレシピなどもあります。

明石といえば、私は子午線というイメージがありますが、若い人の中では何が明石の特徴とし

て捉えられているのでしょうか。

(安原)

商店街、たこフェリー、天文科学館など自分達で盛り上げる努力はしているのですが、お互いをリンクさせていく状況を作っていくかなくてはいけないと思っています。

(佐藤)

今、明石の観光のお客さんはどこに来るのですか。

(安原)

魚の棚、明石公園が多いです。ただ、観光のお客さんが来られた時に、明石だけで一日中観光とか、泊まっていくというのは難しいと思います。今ある素材を高めて、お互いをリンクさせるようなことを始めないといけないと思います。まだそれすらできてない状況があります。

(井上)

明石は通過されてしまって、降りていただけない状況はあるのかなと、それは体感します。

(佐藤)

宿泊する方を呼ぶために、新しいホテルを作らないといけないということはないと思います。短時間だけど確実に楽しんでもらい、お土産も買ってもらえるという感覚でもいいと思います。明石の特性を考えると、狙いはそこにあるような気がします。

(安原)

魚の棚では、軸は地元のお客さんというのを前面に出しているのですが、アンチ観光という商売ではなくて、短時間しか滞在しない方であっても対面販売などで気に入って頂く努力をしていく、そうすることで、次にもまた来ていただくということを考えています。

(佐藤)

ホームページでもお気に入りというのがあります。若い人も自分にとって役に立つもの、好きなものには拘りますね。これからのまちづくりを考えて何が不足している、何が欲しい、そういうのがありますか。

(安原)

後継者や若い世代が少ないと思います。これから先を考えたとき、今やっていることを次の人間が引き継いでいって欲しいと思っています。もう一つは行政と一緒にまちづくりなどやっているのですが、一緒にやった後に検証を行うことが大事だと思います。

(佐藤)

先だけを見るのではなく、これまでを見直すというステップを踏んでいく必要もあると思います

(井上)

暮らしていくには申し分なく、100点に近いのではないのでしょうか。生活面は何が問題あるのかなというぐらいに整っていると思います。ただ他の地域よりちょっと元気がないかなとは感じます。

(佐藤)

何か市民として出来ることはあるのでしょうか。

(井上)

明石市民全員が明石の営業マンになるくらいに市外や県外の人とコミュニケーションをとっていくということも大事ですが、市外等から来られた方が、気持ちよく明石でお金を落として帰っていただける雰囲気にするということではないかなと思います。

(佐藤)

神戸から見たら明石は良い所ですが、誇りを持つというのは、住んでいて良いというだけではなく、他から見て素晴らしいとか、褒めてもらえるものも必要ではないですか。

(井上)

明石の場合は多分、褒めて欲しいというのではないと思います。充分満足というところだと思います。ただ明石も含めて、瀬戸内に囲まれた地域というのは、どこも同じ様な感じなので、そこで競い合っても仕方がないと思います。ちょっと大げさですがネットなどを利用して、国内だけでなく海外を見据えるなど、次のステージの事業や手法を考えたらいいと思います。

(佐藤)

これからどのように商売していきたいですか。

(安原)

まちづくりでもそうですが、継続しているところが魅力的です。楽しくやりながら、続けていけるような範囲のことでやれたらいいと思っています。これからはもっと広く市民の方などネットワークを繋いでいく中で、一緒にまちを作っていくことが出来るようになればと思います。

(佐藤)

そういう感覚は非常に大事だと思います。井上さんはどうですか。

(井上)

市民目線としては、友達が市外に多いので情報発信のお手伝いです。事業者目線としましては、私の知り得ている人脈を明石市内の関係者に繋いで行きたいと思っております。

(佐藤)

まちづくりとかで海外に行かれた時に参考になる事例とかありますか。

(井上)

モロッコなどでは屋台小屋みたいなところでも光ケーブルが繋がって、パラボラアンテナで衛星放送が受信される環境があり、情報が集中する仕組みがありました。スイスのテレビ番組では、チャンネルを変えれば、英語・フランス語・ドイツ語等、世の中はそれぐらい進んでいるのだと感じました。

(佐藤)

これから総合計画を作っていくにあたって、様々な世代の方が集まって議論して、まちづくりに参加していくことが大事だと思います。出来ないことを人の責任にするのではなくて、自分は何ができるのかという発想から皆が集まっていくと、いいものができるのではと思います。今でも充分満足だとおっしゃっているのですが、この環境を本当に活かすのは、やはり市民の力だと思います。是非皆さんで力を入れてやって頂きたいと思います。

(司会者)

ありがとうございました。市としましては、総合計画の作成に向けて、市民の皆様からのご意見やご提案を活かしていきたいと思っております。これをもちまして、まちづくり講演会を終了させていただきます。本日は貴重なお時間をありがとうございました。